

探究的な学習の在り方に関する研究推進地域

連携中学校区：呉市立天心中学校区

連携地域を構成する学校

学校名	学級数	児童生徒数
呉市立天心中学校	5	81人
呉市立天心小学校	9	187人

(R4.11.1現在で記入)

1 指導上の課題

(1) 生活科・総合的な学習の時間についての課題

- ・各学年の学習内容の系統性が未整理で、各学年で扱う問い・単元づくりが単発的になっている。
- ・総合的な学習の時間と各教科や領域等との関連付けおよび年間指導計画が未整理で、カリキュラムの「横のつながり」が明確ではない。
- ・ルーブリックを活用した「単元末」の具体の姿が想定不足であり、児童生徒との目指す姿の共有が不十分である。

(2) 児童生徒についての課題

- ・地域や社会に主体的に関わろうとする意識が十分でない。
(小学校70.8%, 中学校 54.5%)
- ・自らの考えを表現することに課題がある。
(小学校79.2%, 中学校 54.6%)

2 研究の概要

(1) 研究テーマ及び研究のねらい

① 研究テーマ

自他の知をつなげ、粘り強く学ぶ児童生徒の育成
～対話・探究・貢献を軸とした授業づくりを通して～

② 研究のねらい

プロジェクト型学習の視点から、教科等を横断しながら、「実生活・実社会の課題を解決（社会へ還元）する学習」「将来こうなるためにはどうしたらいいだろう？」と考え、探究する学習」を行えるよう、これまでの実践の充実または新規の単元開発を進める。そして、こうした取組を通して、対話を通じて自他の知をつなげ、自ら設定した課題について粘り強く探究する児童生徒を育成する。

(2) 資質・能力の設定について

育成を目指す資質・能力を「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「自主性、主体性」と設定し、その中でも「思考力・判断力・表現力」に焦点を当て、具体の姿を次のように想定した。

○思考力・判断力・表現力

後期	(実社会・実生活の中から) 問いを見いだし、効率的・効果的に分析して、根拠を明らかにしながら、論理的に表現することができる。
中期	(実社会・実生活の中から) 問いを見いだし、効率的・効果的に分析して、根拠を明らかにしながら、順序立てて表現することができる。
前期	身のまわりから問題を見つけ、集めた情報から考え、理由を明らかにしながら、相手に伝えることができる。

(3) 取組について

【探究的な学習の充実に向けての取組】

○探究的な学習における課題に対する方策の充実

- ・昨年度検討した方策をもとに、防災に関する地域アンケートの分析から「問い」を見いだし、目的に応じた他者との協働の場を仕組んだりしながら、社会に還元する「提案型」のゴール」を児童生徒とともに設定した。

○外部人材を活用した授業展開または新たな外部人材の発掘

- ・呉工業高等専門学校の教授と学生を招いた防災学習会の開催
- ・地元事業所やボランティア団体と連携した調べ学習
- ・呉市復興総室や危機管理課と連携した学習

○学びのフレーミング（枠づくり）

- ・1枚ポートフォリオの作成・試行
- ・ICTを活用した振り返りの蓄積
- ・単元ルーブリックに基づく目指す姿を児童生徒と共有
- ・呉版単元構想シートを活用した単元設計

○オンラインでの海外との交流

- ・東ティモール民主共和国との防災交流（JICA）

○義務教育学校開校に向けた新校舎の活用

- ・新校舎に込められた思いを継承する学習
- ・防災宿泊体験の実施

【小中連携の取組】

① 児童生徒の関わり

○総合的な学習の時間における小中交流の場の設定

- ・過去に天恵で起こった災害の記憶を継承する取組（小学3・4年、中学2年）

② 教職員の関わり

○総合的な学習の時間に係る指導体制の工夫

- ・小学校5～6年生及び中学校1～3年生におけるT・T指導（学級担任と研究推進リーダー）

○小中合同研修会の開催（全8回）

- ・「本質的な問い」や「探究的な学習」に係る理論研修
- ・小中合同授業研究会の開催とそれに係る学習指導案の検討
- ・ルーブリックに基づく研究協議
- ・教育課程編成に向けた教科担当間の連携

【資質・能力の評価】

○校区として、年度当初に、育成を目指す資質・能力を設定。中学校区研究推進計画にも位置付けた。

○小中それぞれ1回、単元ルーブリックを活用した総合的な学習の時間の研究授業を実施した。研究協議では、児童生徒の具体の姿をとりあげ、単元ルーブリックに基づく協議を行った。

○授業ごと、学期ごと、単元ごとにまとめた振り返りの記述を評価に活用。振り返りの視点を、その単元の評価規準に沿った内容とし、ICTを活用した振り返りの蓄積を行った。また、児童生徒が作成したプレゼンテーションや掲示物及びその作成過程を記録することで、評価に活用することができた。

3 実践事例

○探究的な学習に向けた課題と方策の整理

課題に対して、9つの方策を立て、総合的な学習の時間を中心に、その方策を具体化する取組を実施した。これにより、授業づくりの視点を明確にすることができ、小中それぞれの強みを活かしながら実践を進めることができた。

課題	方策
探究課題が児童生徒自身のものとなっていない。	①探究課題に対し、開いた問いづくりを行い、発達段階に応じた分類する。 ②生徒が探究課題に係る基礎データを整理し、データから「問い」を導き出せるように仕組む。

目的が不明確。情報収集が形式的。	③実現したい姿を明確にし、その実現に必要な資源を検討しながらプロジェクトを立ち上げる。「問い」を追究するために、必要かつ適切な情報収集を選択・実行。
学んでほしいことを児童生徒に順に与えている。	④体験で終わる取組の廃止。 ⑤「問い」の事前検討時に、児童生徒の発想を想定した対応案を準備する。
「まとめ・表現」の取組の停滞	⑥積極的に失敗させる。 ⑦目的に応じた他者（専門家、行政、地域住民等）と協働する場を仕組む。
探究のサイクルが繰り返されない。	⑧提案型のゴール設定。 ⑨「問い」の階層の整理。

○「情報収集」としての防災宿泊体験（方策④）

小学校4年生が、新しく建設された新体育館に宿泊し、避難所生活を体験することを通じて、避難時に必要なことを学習する場を設定した。この新体育館は、地域の防災拠点としての機能を備えている。児童は、宿泊に必要なものを各自が準備し、持ち寄った防災食を食べたり、避難用具を活用したりした。さらに、備蓄物の段ボールベッドを自分たちで組み立てるなど、実体験を通して、避難生活に必要なことを学ぶことができた。



○社会に還元する「提案型のゴール」（方策⑧）

小学校6年生は、「新体育館に込められた思い」を継承していこうと考え、地域への発信や学校に來校された方々にプレゼンテーションする場を設定した。また中学校1年生では、青年海外協力隊（JICA）と協力し、東ティモール民主共和国の防災研修員の方々と、オンラインで防災交流会を行った。中学生がこれまで学んだ成果を報告し、現地の未来のまちづくりについて考え合う場を設定した。



○外部人材を活用した防災学習会（方策⑦）

中学1～3年生は、国立呉工業高等専門学校の教授および学生の方々と協働して防災学習に取り組んだ。夏休みには生徒自らが地域を回ってアンケート調査を実施し、データの集計と分析を通じて、地域の課題解決を模索した。



4 研究の成果と課題等

(1) 成果

① 学習アンケートの結果

令和4年度中学校区学習アンケートにおける肯定的な回答（％）

項目	課題意識	整理・分析	表現
4月	93.7%	90.7%	91.5%
1月	98.5%	92.3%	87.0%
差	+4.8%	+1.6%	-4.5%

解決しようとする課題（ねらい）について、自分事として捉え、「〇〇はなぜだろう」と問いをもって考えている児童生徒が多くなっている。表現について肯定的な回答の割合が減少したのは、発表内容に求めるレベルが上がってきていることにより、「まだまだ高いレベルを目指せる」と向上心が生まれてきている結果であると考えられる。

② 児童生徒の変容

「思考力・判断力・表現力」が高まったと判断できる発言や記述が増えた児童生徒の割合（令和4年1月、単元開発学年）

小学6年生	中学1年生
82.1% (28人中23人)	80.9% (21人中17人)

○相手意識・目的意識をもち、計画を立て、粘り強く情報収集やまとめ・表現に取り組めるようになってきている。

児童Aの記述：今日気をつけたことはたくさんあります。まずタブレットばかりを見ないことです。しっかりお客様の様子を確認しながら話すことができました。また、分かりやすいように指し示したり、豆知識や工夫などについても詳しく説明することができました。その場にあった対応もしっかりこなすことができました。その結果、〇〇さんにもこの新体育館、フロア、特別教室の魅力や機能をしっかり知っていただき、褒めていただくことができました。

○具体的なデータをもとに、情報の整理・分析を行い、自分の考えを導き出せるようになってきている。

生徒Bの記述：（自作のアンケート調査の結果から）天竺に住んでいる高齢者の方々は、インターネットの扱いに不慣れで、インターネット検索に困る人が多いと思っていた。しかし、アンケートの結果を見ると、インターネット検索に困っている人は一部で、雨の音で地域の防災放送やテレビの音が聞こえにくいということだった。そのため、一家一台「広報ラジオ」などを置き、自分に合わせた音量調整ができるようにすることが大切だと考えました。

(2) 課題

① 児童生徒の「表現」に関する肯定的な回答の割合	「分かりやすい発表」に関する指導不足、理由や根拠をもって発表させる指導が未だ不十分
② 各学年における探究的な学習の進め方	児童生徒の「問い」を生かして考えさせる指導が未だ不十分。教師のファシリテート力不足
③ ルーブリックの活用	児童生徒と目指す姿の共有が未だ不十分。ルーブリックを提示したことによる児童生徒の学習意欲の鈍化

(3) 今後の改善方策等

① 学びを社会に還元する取組の充実	多様な表現方法および相手（受け手）からのフィードバックの充実
② 探究的な学習における持続可能な体制づくり	単元の方向性および展開に関する研修の充実、IT体制の再構築
③ ルーブリックに基づく児童生徒の見取りの充実	ルーブリックの提示の仕方の工夫